

令和3(2021)年度 社会福祉法人ひかり福祉会 事業報告

ある小学校にて、先生が児童にこんな質問をされました「ふくし」の反対の言葉はなんですかと。児童は「せんそう」と答えたそうです。研修にてこのエピソードを紹介して頂き、この場面を目の当たりにした講師は震えが走ったと表現されています。まさに「ふくし」の本質を捉えている場面となります。「ふくし」は世界が平和でなければ成り立ちません、しかしながら世界は不安定で、絶えず紛争、戦争が起り、多くの方々が亡くなっておられます。

また、長引くコロナ禍未だ終息は見通せない現状です。世界では死者、重症者減少に伴いない、規制解除を進め以前の社会生活を送る様相となり、いずれ日本も同じ方向となる事が予測されます。

コロナという病と日本人特有の同調圧からくる差別など、様々な社会の歪みが露呈する2年間でした。自身の価値観や都合を主張し合う、それでいてどこか他人事、そして人任せではないか。私たち自身も暮らしのゆとりが削られ不寛容さが増す中、必ずしも「ふくし」は正しいもの、尊いものではなく、消費される「サービス」となっている。社会の複雑さが増し、社会福祉法人という人格をもつ私たちは、福祉がサービス化する中、果たすべき役割はなんであるのか問われる時代となっています。

流動性が高く、正解がない時代。福祉も例外でない事を認識しなくてははいけない。

一方、地域は少子高齢化が進み、地方ほどその速度は増しています。国は、地域共生社会の実現に向け様々な施策を打ち出している、その一つが重層的支援施策です。児童、障害、高齢縦割りの仕組みでなく全てが一つになる、横断的に支援を構築していく事が進んでいる。1つの家庭の中で、重複した課題を持つ事が常態化している事を見据えての対応です。多職種連携が進み、チームとしての支援が求められ、一方支える支援員は限られている。職員の高齢化、成り手不足の要因からも、サービスをいたずらに拡大するのではなく、連携法人等制度を生かし、地域の中での協力関係の下、最適なサービス提供体制が求められています。

この様な現状の中、当法人は理念の実現

「ともに挑戦し、時にはユニークな発想で、えがおあふれる人生をつくります」を掲げ事業、実践を進めた1年であった。理念の浸透としては、リニューアルを行ったばかりでもあり、浸透は図るこれからの大切となる。ユニークな取り組み含め発信や立ち返る言葉として常々出していく事が必要です。

重点課題に於ける結果進捗状況は、工房ふれっしゅ生活介護実現には至っていない。同時にたんぼぼ作業所との統合、連携した支援、事業となる構想が求められている。支援センターそら移転、蛍の家建設については現状図面を起こしての進捗状況です。

ここ数年課題として取り上げ進めてきたが、必要であることの理解はしているが、実行する事の行動に欠け、組織としての動きを作り切れなかった。重点としつつも大きな進展が見られない事は、組織としての動き、規律、理解度含め未熟であると言わざるを得ない。

また、利用者の減少は顕著である。この為収入上も落ち込みが見られている。事業所としての魅力、支援力の高さを付けること、選ばれる事業所とならなければ今後の事業継続は厳しくなると考える。提起として、(祝日出勤、8H労働時間)、ひかり福祉会2025をおこなった。しかしながらまだ十分な相互理解には至っていない。この理解が重要ですし、私たち自身がこの先に起こる「変化」に対応していく力がなくては、利用者ニーズ、利用者の支援は後退を招く一方である。職員自身が仕事に対し、「充実感を得ているのか」「誇り」と「熱意」を感じられているか。「何故この仕事をしているのか」打てば割れてしまうモノでなく、「本物」が必要です。エンパワーメントされた組織まだまだ途上であるが、目指

すところであり、実現できなければユニークな組織となり得ないを考える。

今年度は様々な提起を通して、「今のひかり福祉会」が露わになりました。

次年度は、ひかり福祉会 2025 を軸と据え、利用者に、地域にどう打って出ていくのかが問われる初年度となります。

少し先の未来の選択権は私たちが持つ為にも、前向きな胎動を築く初年度としていきたい。

2022（令和4）年03月29日理事会

社会福祉法人ひかり福祉会

理事長 高橋 信二